

大学生の日常生活における集合罪悪感と集団同一性の関連

白石彩乃・樋口匡貴・蔵永 瞳

The relationship between collective guilt and the group identification among university students

Ayano Shiraiishi, Masataka Higuchi and Hitomi Kuranaga

内集団成員による外集団に損害を与える行為について、自分が直接その行為に関わっていないにもかかわらず自責の念や申し訳なさを感じることは日常生活の中で経験しうることである。自分自身の行為でなくても感じる罪悪感として、集合罪悪感がある。本研究では大学生を対象に、日常生活の中で内集団成員が外集団に損害を与えたという状況を用いて集合罪悪感と集団同一性の関連について検討した。集団同一性には集団全体に対する同一性(Whole-group 同一性)と行為集団に対する同一性(Subgroup 同一性)があることが先行研究で指摘されているため、それぞれの同一性を測定した。先行研究と同様に、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が独立して集合罪悪感に影響を及ぼしていることが示された。また先行研究とは異なり、集団同一性から集合罪悪感、個人罪悪感についての影響を正当性認知が媒介するという結果は得られず、個人の有責性認知が集合罪悪感への影響を媒介するという結果であった。

キーワード：集合罪悪感、集団同一性

問題

集合罪悪感とは

自分の所属する集団の成員が他の集団に迷惑をかけたと聞いたとき、われわれはしばしば自分が直接行った行為ではなくても申し訳なさや後悔を感じる。このように、自分自身の行為に対してではなく、内集団成員の行った加害行為に対して感じる罪悪感を集合罪悪感と呼ぶ。集合罪悪感とは、外集団に損害を与えた行為に内集団の責任があると認めるとき、集団成員が経験する苦痛・嫌悪の感情と定義されている(Branscombe, Slugoski, & Kappen, 2004)。集合罪悪感とは自分の行為ではないものに対して感じるという点で、自分の行為について感じる罪悪感と区別される。

集合罪悪感に関する先行研究

集合罪悪感に関する先行研究は、戦争犯罪や人種差別などの過去に実際に起こった話題を用いて、

過去に損害を与えた集団に現在実際に所属している人を対象に調査や実験を行っているものが多い。例えば、ベルギーのコンゴ植民地化(Klein, Licata, & Pireucci, 2011), 白人の黒人差別(Powell, Branscombe, & Schmitt, 2005), 企業の不正(本間, 2009) を扱った研究がある。その一方で Goto & Karasawa(2011) のように、架空の会社買収の話題について、学生を対象とした場面想定法による行っている研究も存在する。このように集合罪悪感についての研究は、集団の規模(民族, 国家など) や与えた損害が比較的大きいものを研究の対象とするものから、企業などのより集団の規模や与えた損害が小さいものについても研究されるようになってきている。本研究では、従来の研究よりもより規模や損害の小さい、日常生活に起こりうる状況での集合罪悪感に関して検討を行う。

集合罪悪感に影響を与える要因として扱われてきたものに、集団同一性の程度がある。Branscombe(2004) は、集団同一性の高い成員は集団の行為を自分の行為のように認識するため集合罪悪感を強く感じることを示した。Gunn & Wilson(2011) の研究でも、集団同一性が高い方がより強く集合罪悪感を感じるという結果が得られている。また、Zebel, Pennekamp, van Zomeren, Doosje, van Kleef, Vliek & van der Schalk (2007) は、行為者との心理的距離に注目し、行為者が自分と血縁のある先祖の可能性が高い場合を心理的距離が近いとし、心理的距離が近い場合には集合罪悪感を含むネガティブな自己意識的感情をより強く感じるということを示した。このように集団同一性が高い方が集合罪悪感を感じるという結果が得られている一方で、逆の結果を示す研究も存在する。Doosje, Branscombe, Spears, & Manstead(1998) は、高い同一性をもつ成員は、集団を脅かすような集団の過去の歴史を受け入れられず、内集団の行為を正当化することで集合罪悪感を低下させるという結果を示している。

集団同一性の高低と集合罪悪感を感じる程度の関係について研究結果が一貫していないことを説明するため、Goto & Karasawa(2011) は、集団同一性に Subgroup 同一性と Whole-group 同一性の2つのレベルを仮定して研究を行っている。Subgroup 同一性とは、損害を与えた行為集団(i.e., 自社の中の買収を行った部門) に対しての同一性であり、行為集団の成員との親しきで操作可能なものである。Whole-group 同一性はより包括的な内集団(i.e., 自分の所属する会社) への同一性である。検討の結果、Whole-group 同一性は正当性の認知に正の影響を与え、正当性が集合罪悪感に負の影響を与えていた。また、Subgroup 同一性は、正当性の認知に負の影響を及ぼし、正当性認知が集合罪悪感に負の影響を及ぼすという結果が得られた。上記の結果は、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が集合罪悪感に対して異なる影響を与えることを示している。これまでの集団同一性と集合罪悪感の関連を検討した研究では、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が混在して扱われていたために集団同一性と集合罪悪感の関連について一貫した結果がでなかったと言えよう。

一方、Klein et al.(2011) は、集団同一性と集合罪悪感の関係についての研究結果が一貫していないことを説明するために、Goto & Karasawa(2011) とは異なる検討を行っている。同研究では、集団同一性が集合罪悪感と曲線関係にあると仮定した研究を行った。具体的には、ベルギー人に対してベルギーのコンゴ植民地化について集合罪悪感を感じる程度を尋ね調査を行っている。この研究においての集団同一性を測定する項目に「あなたはベルギー人として…」という表現が含まれているため、この集団同一性に関する項目は、Whole-group 同一性を測定していると考えられる。検討の結果、

集団同一性(Whole-group 同一性)が高い場合や低い場合よりも集団同一性が中程度の場合が集合罪悪感を最も強く感じる事が明らかとなり、Whole-group 同一性と集合罪悪感の間には曲線関係があることが示された。

先行研究の問題と本研究の目的

集合罪悪感の測定の妥当性 先行研究の集合罪悪感測定項目は、Branscombe et al.(2004)による Collective Guilt Scale を基にしているものが多い(Gunn & Wilson, 2011; Powel et al., 2005)。この尺度は、内集団成員のネガティブな行為の結果に対する後悔・罪悪感(4項目、例：“I feel regret for my group’s harmful past actions toward other groups.”)と与えた損害への賠償願望(1項目、例：“I believe that I should repair the damage caused to others by my group.”)からなっている。このように内集団成員による行為の結果について罪悪感を感じたかを尋ねる項目内容では、内集団成員による行為そのものに対して抱く“集合罪悪感”と、内集団の行為を止められなかったという“個人的な罪悪感”のどちらを感じて回答しているのか明らかではない。定義に即した集合罪悪感の検討をするためには、集合罪悪感と個人的な罪悪感を区別して測定する必要がある。

集団同一性のレベル 集合罪悪感と集団同一性の関連を検討している研究は、集団同一性を測定する際 Whole-group 同一性に焦点を当てているものが多い(Gunn & Wilson, 2011; Klein et al., 2011; Powel et al., 2005)。また、Zebel et al.(2007)では、行為を行った集団との心理的距離で集団同一性を測定しており、Subgroup 同一性に焦点を当てている。Goto & Karasawa(2011)が指摘するように、集団同一性と集合罪悪感の関連を検討した先行研究は、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性を同時に測定していないためにどちらの同一性と集合罪悪感の関連の結果であるのか混在している可能性がある。

同一性と集合罪悪感の関連に曲線関係があることを明らかにした Klein et al.(2011)の研究では、Subgroup についての測定は行っていないため、Subgroup 同一性と集合罪悪感の関係については検討が行われていない。2つのレベルの集団同一性を考慮している Goto & Karasawa(2011)の研究にも、Whole-group 同一性と集合罪悪感の関連を検討する際に、Klein et al.(2011)の研究で明らかとなっている曲線関係を仮定した検討を行っていないという問題がある。また、Subgroup 同一性についても、直線関係を仮定した2水準での検討を行っているため、Subgroup 同一性が Whole-group 同一性と同じように集合罪悪感と曲線関係を持つ可能性もある。

本研究の目的 以上のことから、先行研究は Whole-group 同一性と Subgroup 同一性の影響が混在しており、さらに Subgroup 同一性と集合罪悪感についての曲線関係を検討していないという問題がある。そこで本研究では、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性をそれぞれ3水準で操作して、集合罪悪感への影響を検討する。その際、「行為そのもの」に焦点を当てるか「自分ができなかったこと」に焦点を当てるかで集合罪悪感と個人的罪悪感を区別して測定する。先行研究(Goto & Karasawa, 2011; 本間, 2009)より集合罪悪感に影響すると考えられる正当性、有責性を媒介変数として扱い、それぞれの変数が集合罪悪感、個人罪悪感にどのような関連があるかを検討する。

方法

実験参加者

大学生・大学院生 52 名(男性 16 名, 女性 36 名) に, 宿題法による質問紙実験を行った。平均年齢は 20.81 歳($SD=1.37$) であった。欠損値には条件内の平均値を代入し, 参加者全てを分析対象者とした。

要因計画

Whole-group 同一性の程度 3(High / Middle / Low) を参加者間要因, Subgroup 同一性の程度 3(High / Middle / Low) を参加者内要因とした二要因混合計画とした。参加者内要因の Subgroup 同一性の提示順はカウンターバランスをとった。実験操作および測定はすべて小冊子を用いて行った。

小冊子の内容

最初に仮想場面を提示したシナリオを読ませ, その場면을よく想像させた後にそれぞれの測定項目に回答するように教示した。

仮想場面の提示と条件操作 「自分の所属するサークル内のグループが講義時間中に騒いだ」という仮想場면을提示した。先行研究で扱われている損害を与えた場面は, 過去の人種差別(Powel et al., 2005) や植民地問題(Klein et al., 2011) という自分が存在しない時点のことを扱っているため, 自分が関わっていないことが明らかである。その場に自分もいて損害を与える行為を行っていた可能性があること, 測定する際に集合罪悪感と個人罪悪感が区別できない可能性がある。自分が存在していないことを明確にすることで自分の関与した可能性を排除できることから, 文章内に自分がその場面にいなかったことを明記した。Whole-group 条件の操作としてサークルの活動に参加している頻度, また Subgroup 条件の操作として騒いだ集団内の成員と自分との親しさを操作した(Table 1)。

シナリオ文中の“1. ___”には Whole-group の操作記述を, “2. ___”には Subgroup の操作記述を挿入した。Whole-group 同一性と Subgroup 同一性は, 自分との関与度の記述を変えることによってそれぞれ 3 段階で操作した(Table 2)。文中の”グループ〇”は, Subgroup の提示順に, それぞれ“グループ A”, “グループ B”, “グループ C”と記述した。

Table 1
提示した仮想場面

あなたはあるサークルに所属しています。そのサークルは毎日活動しており、あなたは
1. _____。

そのサークルには学生が自由に使える部屋がありますが、その部屋は通常の講義室や先生方の研究室と同じ建物の中にあります。

ある日そのサークル部屋で、あなたのサークルの中の何人か（グループ○）がおしゃべりをしていて盛り上がり、非常に大きな声で騒いでいたそうです。グループ○の中には
2. _____。その時、部屋の扉は開いていて、声が廊下中に響いていたそうです。その時間帯は、平日の昼間で、他の講義も行われていました。

その時あなたは、家で用事をしていて、部屋にはいませんでした。

Table 2
提示したシナリオ内の Whole-group と Subgroup の操作記述

	High条件	Middle条件	Low条件
1. Whole-group	毎日参加しています	週に一回程度参加しています	活動にはほとんど参加していません
2. Subgroup	あなたの親しい友人がいました	あなたと挨拶する程度の顔見知りがありました	あなたの話したことのある人はいませんでした

測定項目 (a) 集団同一性(4項目) 集団同一視尺度(Karasawa, 1991; 大石, 2001)の中から、4項目を採用した。それぞれ「あなたは…」という記述を「私は…」という記述に変え、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」で回答できるように文章を作り変えた。Whole-group, Subgroup についての同一性をそれぞれ尋ねた。**(b) 集合罪悪感(4項目)** 内集団の行為そのものに対する罪悪感を尋ねるため、Branscombe et al. (2004) や本間(2009) を参考に、本研究のシナリオに沿って「友人たちが騒いだことを…」と内集団の行為に焦点を当てた項目に自作した。**(c) 罪悪感(4項目)** 内集団の行為に対して自分ができなかったことに対する罪悪感を尋ねるため、Branscombe et al. (2004), 本間(2009) を参考に、「騒いでいた○○を止められなかったことについて…」と内集団の行為を止められなかったことについて焦点を当てた文章にして作成した。**(d) 内集団の行為への有責認知(3項目)** 内集団の行為に対して自分に責任があったかどうかを尋ねるものを自作した。**(e) 正当性(3項目)** 内集団の行為に正当性があったかどうかを尋ねる質問項目を自作した。**(f) 人口統計学的項目** 学年、年齢、性別を尋ねた。

(a) ~ (e) の質問項目は、全て「全く当てはまらない=1点」「ほとんど当てはまらない=3点」「やや当てはまる=5点」「非常に当てはまる=7点」の7段階評定であった。質問紙の全項目を Table 3

に示した。質問項目の中の〇〇には、Whole-group 同一性を尋ねる項目には“サークル”，Subgroup 同一性を尋ねる項目と集合罪悪感，個人罪悪感，有責性，正当性を尋ねる項目には，Subgroup の提示順に，それぞれ“グループ A”，“グループ B”，“グループ C”と記述した。

Table 3
測定項目の全項目

同一性	私にとって重要な人が〇〇の中にいる	
	私は，〇〇に愛着を感じる	
	〇〇に私の考えや行動に影響を与えたメンバーがいる	
	私の親しくしている人が〇〇にいる	
集合罪悪感	〇〇が騒いだことを，申し訳なく思う	
	〇〇が騒いだことについて，気がとがめる	
	〇〇の行為について，悔いを感じる	
	〇〇の行為について，罪悪感を感じる	
個人罪悪感	騒いでいた〇〇を止められなかったことについて気がとがめる	
	〃	悔いを感じる
	〃	罪悪感を感じる
	〃	申し訳なく思う
有責性	私には，騒いだ〇〇に事前に注意する責任があったと思う	
	〇〇の行為を防ぐべきだったと思う	
	〇〇の行為は，私にも責任があると思う	
正当性	私は，〇〇の行為は仕方がなかったと思う	
	私は，〇〇の行為は正しかったと思う	
	〇〇が騒いだことは間違っていたと思う	

結果

各変数の記述統計量

Whole-group 同一性得点(4~28 点)，Subgroup 同一性得点(4~28 点)，集合罪悪感得点(4~28 点)，個人罪悪感得点(4~28 点)，有責得点(3~21 点)，正当性得点(1~7 点) を条件別に算出した。各条件の平均値と標準偏差，クロンバックの α 係数を Table 4 に示した。正当性得点は 3 項目でのクロンバックの α 係数が低かったので($\alpha < .58$)，Goto & Karasawa(2011) で使用されていた項目に近い，「〇〇の行為は正しかったと思う」の一項目のみを採用し，得点を算出した。

Table 4
各変数の平均値(標準偏差), クロンバックの α 係数

Subgroup 条件		High		Middle		Low	
Whole-group 条件		<i>M (SD)</i>	α	<i>M (SD)</i>	α	<i>M (SD)</i>	α
High <i>N</i> =18	Whole-group 同一性得点	21.94 (4.14)	.87	19.11 (4.46)	.85	16.33 (5.77)	.90
	Subgroup 同一性得点	20.61 (3.38)	.75	11.06 (4.28)	.92	6.28 (2.72)	.88
	集合罪悪感得点	19.39 (4.79)	.85	14.56 (5.58)	.89	13.89 (4.71)	.76
	個人罪悪感得点	15.61 (6.29)	.93	11.00 (5.42)	.92	10.11 (4.38)	.90
	有責性得点	12.44 (2.77)	.52	9.67 (3.18)	.66	8.89 (3.39)	.63
	正当性得点	1.89 (1.41)		1.33 (.49)		1.22 (.43)	
Middle <i>N</i> =18	Whole-group 同一性得点	20.22 (4.74)	.89	14.78 (5.11)	.87	13.33 (6.09)	.90
	Subgroup 同一性得点	19.72 (3.71)	.69	10.22 (4.18)	.86	6.89 (2.89)	.72
	集合罪悪感得点	17.78 (6.31)	.87	15.28 (5.97)	.89	13.83 (6.34)	.89
	個人罪悪感得点	16.22 (6.73)	.89	12.94 (7.70)	.97	12.06 (7.21)	.96
	有責性得点	11.44 (4.30)	.79	9.06 (3.65)	.51	8.94 (3.90)	.65
	正当性得点	1.61 (1.20)		1.22 (.55)		1.17 (.38)	
Low <i>N</i> =16	Whole-group 同一性得点	18.81 (4.01)	.78	9.19 (3.69)	.87	6.56 (2.63)	.76
	Subgroup 同一性得点	17.75 (4.81)	.85	7.19 (3.39)	.87	4.69 (1.58)	.87
	集合罪悪感得点	12.69 (7.05)	.88	9.06 (5.48)	.80	8.13 (5.39)	.88
	個人罪悪感得点	10.44 (6.95)	.91	8.63 (6.79)	.96	6.56 (4.55)	.95
	有責性得点	8.31 (2.87)	.53	6.81 (3.02)	.73	5.81 (2.93)	.46
	正当性得点	1.38 (.62)		1.13 (.34)		1.19 (.54)	

操作チェック(Subgroup)

Subgroup の記述の種類によって Subgroup 同一性が操作できているかを確認するため, 独立変数を Whole-group 3 水準 (参加者間要因), Subgroup 3 水準(参加者内要因), 従属変数を Subgroup 同一性得点とする二要因分散分析を行った(Figure 1)。

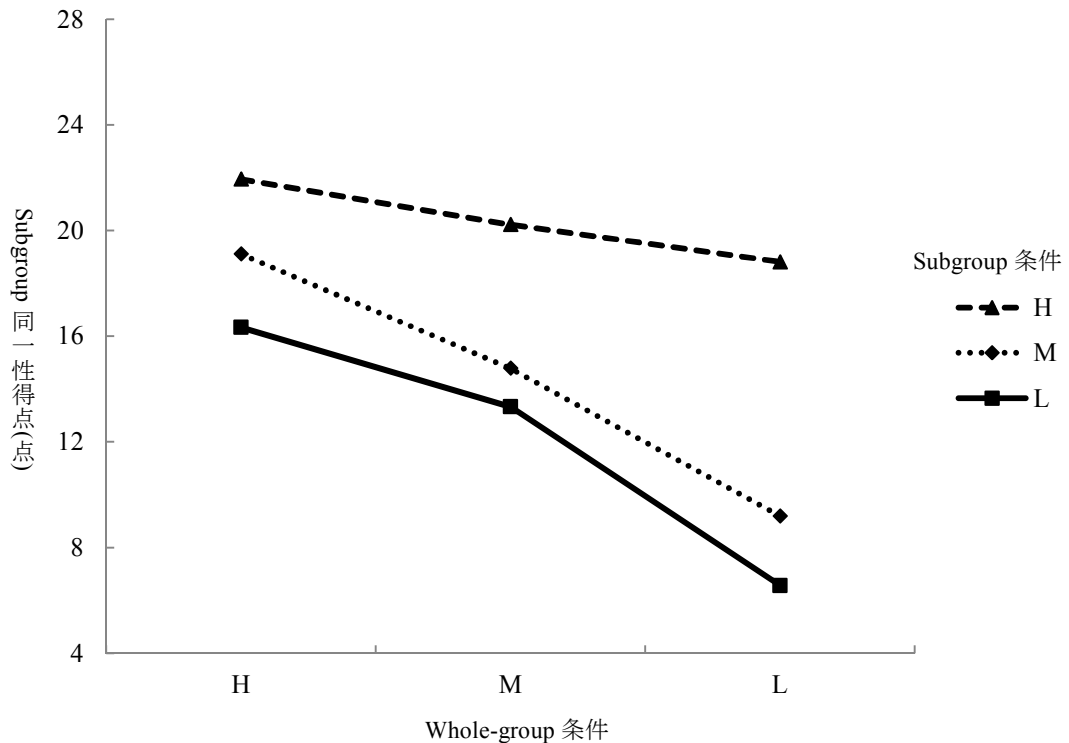


Figure 1. 各条件別の Subgroup 同一性得点の平均値

分散分析の結果, Subgroup の主効果が有意であった($F(2, 98) = 277.012, p < .001$)。Bonferroni 法(5%水準)による多重比較を行うと, Subgroup(High), Subgroup(Middle), Subgroup(Low) の順に Subgroup 同一性得点が高かった (High > Middle > Low)。さらに Whole-group の主効果も有意であった($F(2, 49) = 5.689, p < .01$)。Tukey の HSD 法(5%水準)による多重比較を行った結果, Whole-group(High) の場合には Whole-group(Low) よりも有意に Subgroup 同一性得点が高かった。また Whole-group (Middle) の場合にも, Whole-group(Low) よりも有意に Subgroup 同一性得点が高かった。Whole-group(High) と Whole-group(Middle) の間で有意差はなかった(High, Middle > Low)。また, Whole-group 条件と Subgroup 条件の交互作用は有意ではなかった($F(4, 98) = .744, n.s.$)。

Subgroup の主効果のみに着目した場合, Subgroup 同一性得点が Subgroup(High), Subgroup(Middle), Subgroup(Low) の順に高くなっているため, 本実験での Subgroup についての操作はおおむね成功しているとみなした。

操作チェック(Whole-group)

Whole-group の記述の種類によって Whole-group 同一性が操作できているかを確認するため, 独立変数を Whole-group 3 水準 (参加者間要因), Subgroup 3 水準 (参加者内要因), 従属変数を Whole-group 同一性得点とする二要因分散分析を行った(Figure 2)。

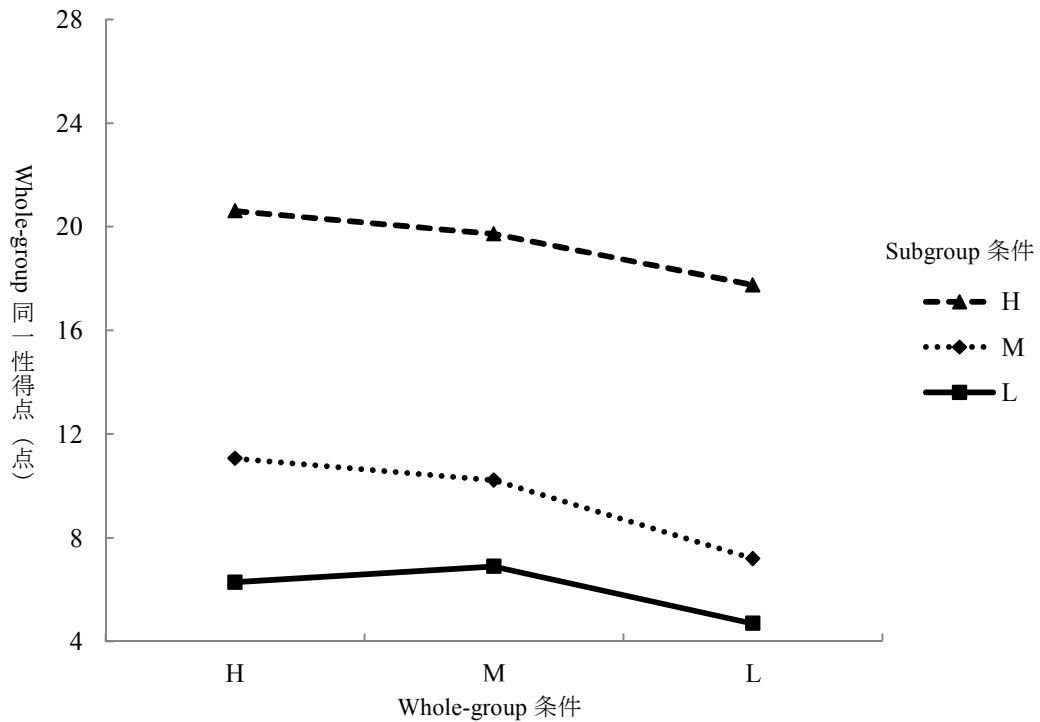


Figure 2. 各条件別の Whole-group 同一性得点の平均値

分散分析の結果, Subgroup の主効果が有意であった ($F(2, 98) = 65.837, p < .001$)。Bonferroni 法(5%水準)による多重比較を行った結果, Subgroup(High), Subgroup(Middle), Subgroup(Low) の順に Whole-group 同一性得点が高かった(High > Middle > Low)。Whole-group の主効果も有意であった ($F(2, 49) = 20.205, p < .001$)。Tukey の HSD 法(5%水準)によって多重比較を行った結果, Whole-group(High), Whole-group(Middle), Whole-group(Low) の順に Whole-group 同一性得点が高かった(High > Middle > Low)。Whole-group と Subgroup の交互作用も有意であった($F(4, 98) = 4.824, p < .001$) ため, 単純主効果の検定を行った。

参加者内要因である Subgroup の単純主効果について検定を行った結果, Whole-group(High) の場合 ($F(2, 98) = 9.92, p < .001$), Whole-group(Middle) の場合 ($F(2, 98) = 16.63, p < .001$), Whole-group(Low) の場合 ($F(2, 98) = 46.58, p < .001$) のそれぞれについて Subgroup の単純主効果が有意であった。Bonferroni 法(5%水準)によって, 多重比較を行った結果, Whole-group(High) の場合には Subgroup(High), Subgroup(Middle) が Subgroup(Low) よりも Whole-group 同一性得点が高かった(High, Middle > Low)。また, Whole-group(Middle) の場合では Subgroup(High) が Subgroup(Middle), Subgroup(Low) よりも有意に Whole-group 同一性得点が高かった(High > Middle, Low)。Whole-group (Low) では Subgroup(High) が Subgroup(Middle), Subgroup(Low) よりも有意に Whole-group 同一性得点が高かった(High > Middle, Low)。

参加者間要因である Whole-group の単純主効果の検定を行った結果, Subgroup(Middle) の場合($F(2, 100) = 13.06, p < .001$), Subgroup(Low) の場合($F(2, 100) = 13.11, p < .001$) において Whole-group の単純主効果が有意であった。Bonferroni 法(5%水準)による多重比較の結果, Subgroup(Middle) の場合には Whole-group(High), Whole-group(Middle), Whole-group(Low) の順に Whole-group 同一性得点が高かった ($\text{High} > \text{Middle} > \text{Low}$)。また, Subgroup(Low) の場合では Whole-group(Low) が Whole-group(High), Whole-group(Middle) よりも Whole-group 同一性得点有意に低かった ($\text{High}, \text{Middle} > \text{Low}$)。

Whole-group 同一性得点に関する上記の結果は, Whole-group 同一性得点が Whole-group と Subgroup 両方の操作から影響を受けることを示している。ただし, Whole-group の操作にのみ着目すると, Whole-group 同一性得点は Whole-group(High), Whole-group(Middle), Whole-group(Low) の順に高くなっているため, 本実験での Whole-group の操作はおおむね成功しているとみなした。

集団同一性と集合罪悪感の関連

集合罪悪感におよぼす集団同一性の影響 Whole-group 同一性, Subgroup 同一性と集合罪悪感との関連を検討するため, 独立変数を Whole-group 3 水準 (参加者間要因) と Subgroup 3 水準 (参加者内要因), 従属変数を集合罪悪感得点とした二要因分散分析を行った (Figure 3)。

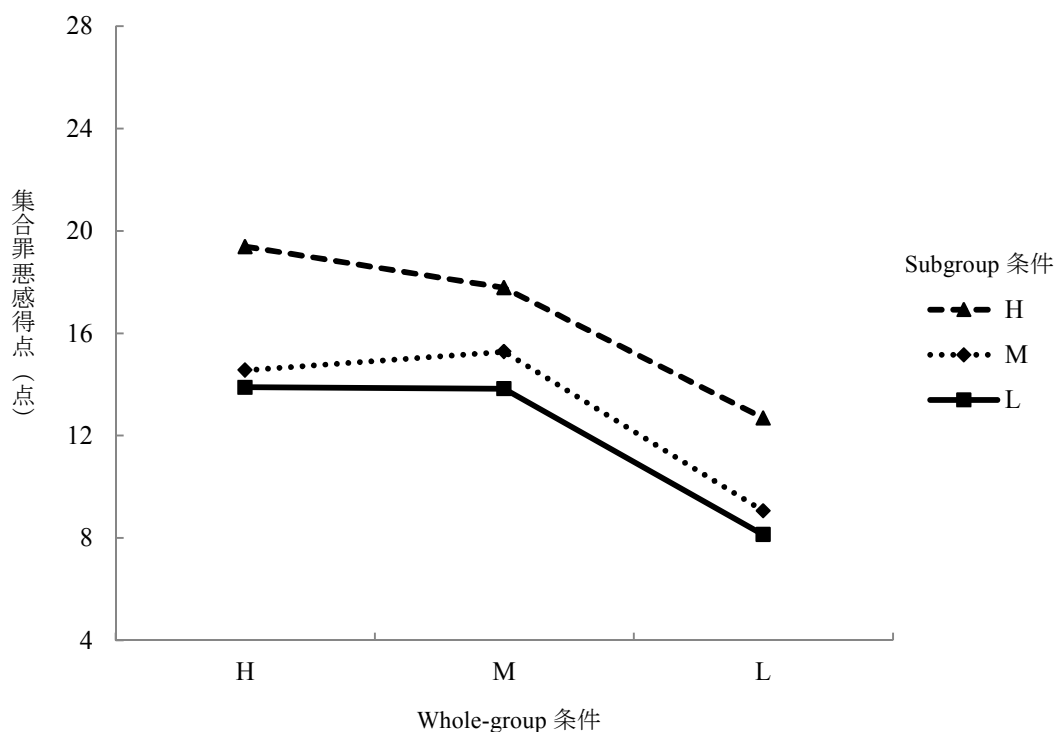


Figure 3. 各条件別の集合罪悪感得点の平均値

分散分析の結果, Subgroup の主効果が有意であった ($F(2, 98) = 24.678, p < .001$)。Bonferroni 法 (5%水準) による多重比較を行った。その結果, Subgroup(High) が Subgroup(Middle), Subgroup(Low) よりも集合罪悪感得点が有意に高かった(High > Middle, Low)。また, Whole-group の主効果が有意であった($F(2, 49) = 7.590, p < .001$)。Tukey の HSD 法(5%水準) によって多重比較を行った結果, Whole-group(Low) が Whole-group(High) と Whole-group(Middle) よりも有意に集合罪悪感得点が低かった (High, Middle > Low)。Whole-group と Subgroup の交互作用は有意ではなかった($F(4, 98) = 6.390, n.s.$)。

正当性・有責性の媒介の検討 集団同一性が, 正当性・有責性を媒介して集合罪悪感・個人罪悪感に影響を及ぼしているかを検討するため, 媒介分析を行った。分析には HADVersion9.52(清水・村山・大坊, 2006) を使用した。Subgroup の 3 条件それぞれについての Whole-group 同一性得点, Subgroup 同一性得点, 有責性得点, 正当性得点の平均を合成得点とし, 媒介分析を行った(Table 5 および Figure 4, Figure5)。

Table 5 各合成得点の平均値(標準偏差)

Whole-group 同一性 合成得点	Subgroup 同一性 合成得点	集合罪悪感 合成得点	個人罪悪感 合成得点	有責性 合成得点	正当性 合成得点
15.74 (4.59)	11.67 (2.77)	13.99 (5.54)	11.64 (5.92)	9.12 (3.18)	1.35 (.50)

まず, Whole-group 同一性が集合罪悪感に及ぼす影響を, 有責性・正当性をそれぞれ媒介変数として媒介分析を行った(Figure 4)。実線は Whole-group 同一性・Subgroup 同一性が有責性を媒介して集合罪悪感に影響を及ぼすモデル, 破線は Whole-group 同一性が正当性を媒介して集合罪悪感に影響を及ぼすモデルを示す。Whole-group 同一性から集合罪悪感へのパス係数の変化は, Whole-group 同一性から集合罪悪感への直接のパス係数から有責性あるいは正当性を媒介した後のパス係数の変化を示している。

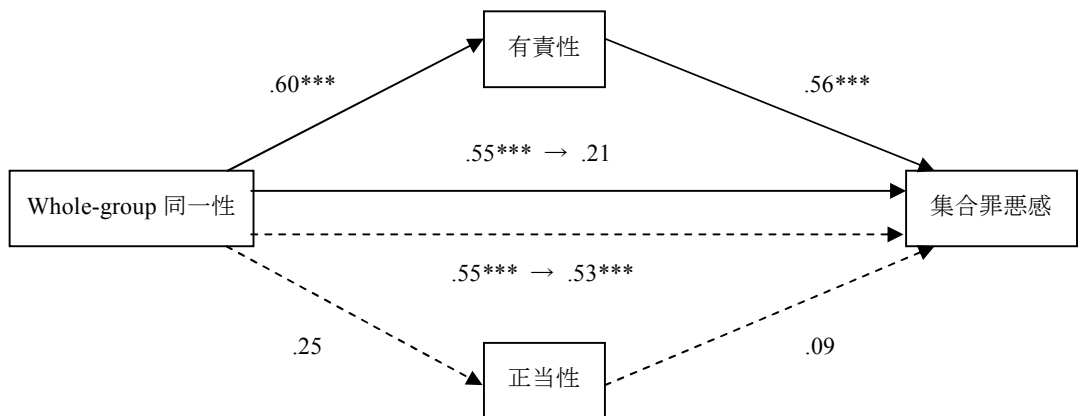


Figure 4 Whole-group 同一性が有責性あるいは正当性を媒介して集合罪悪感に影響を及ぼすモデル

有責性を媒介させることで、媒介させる前に比べて、Whole-group 同一性から集合罪悪感への影響は.55($p < .001$) から.21(*n.s.*) へと変化した。有責性の間接効果は.34であった。この値が0よりも有意に大きいかを検査するため、ブートストラップ法(リサンプリング回数 1000 回) によって 95%信頼区間を算出した。その結果、信頼区間に0が含まれておらず ([.22, .69]), 間接効果は有意であることが示された。また、正当性を媒介させることによって、媒介前と比べて Whole-group 同一性から集合罪悪感への影響は.55($p < .001$) から.53 $p < .001$ へと変化した。この時の正当性の間接効果は.02であった。この値が0よりも有意に大きいかの検査をするため、ブートストラップ法(リサンプリング回数 1000 回) によって 95%信頼区間を算出した。その結果、信頼区間に0が含まれており ([-.04, .18]), 間接効果は有意ではなかった。

次に、Subgroup 同一性が集合罪悪感に及ぼす影響を、有責性・正当性をそれぞれ媒介変数として媒介分析を行った(Figure 5)。実線は Whole-group 同一性・Subgroup 同一性が有責性を媒介して集合罪悪感に影響を及ぼすモデル、破線は Whole-group 同一性が正当性を媒介して集合罪悪感に影響を及ぼすモデルを示す。Subgroup 同一性から集合罪悪感へのパス係数の変化は、Whole-group 同一性から集合罪悪感への直接のパス係数から有責性あるいは正当性を媒介した後のパス係数の変化を示している。

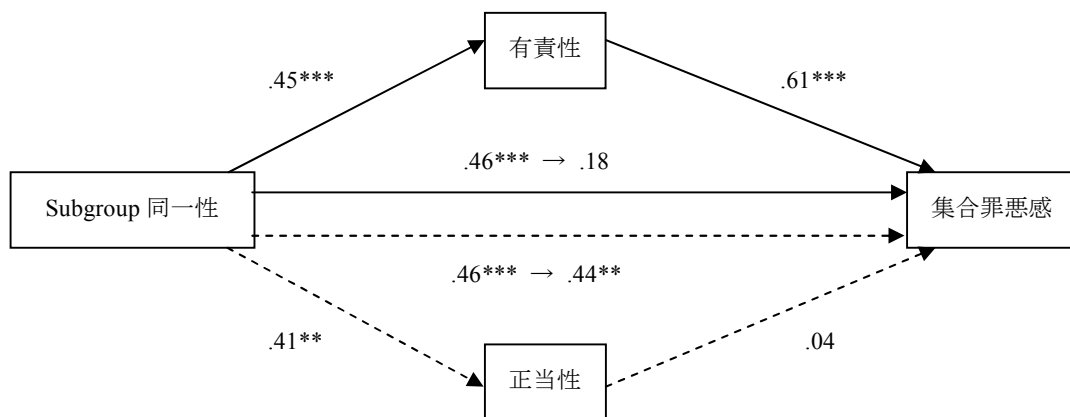


Figure 5 Subgroup 同一性が有責性あるいは正当性を媒介して
集合罪悪感に影響を及ぼすモデル

有責性を媒介させることで、媒介させる前に比べて、Subgroup 同一性から集合罪悪感への影響は.46($p < .001$) から.18($n.s.$)へと変化した。有責性の間接効果は.28であった。この値が0よりも有意に大きいことを示すため、ブートストラップ法(リサンプリング回数 1000 回)によって 95%信頼区間を算出した。その結果、信頼区間に0が含まれておらず([.26, .96]), 間接効果は有意であることが示された。また、正当性を媒介させることによって、媒介前と比べて Whole-group 同一性から集合罪悪感への影響は.46($p < .001$) から.44($p < .01$)へと変化した。この時の正当性の間接効果は.02であった。この値が0よりも有意に大きいかを検討するため、ブートストラップ法(リサンプリング回数 1000 回)によって 95%信頼区間を算出した。その結果、信頼区間に0が含まれており([-1.18, .32]), 間接効果は有意ではなかった。

考察

本研究では、従来の研究(Goto & Karasawa, 2011; Klein et al., 2011; Powel et al., 2005) などよりもより規模や損害の小さい、日常生活で起こりうる状況での集合罪悪感を扱った。その際、「行為そのもの」に焦点を当てるか「自分ができなかったこと」に焦点を当てるかで集合罪悪感と個人的罪悪感を区別して測定した。また、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性をそれぞれ3水準で操作し、それぞれの同一性が集合罪悪感へ与える影響を検討することを目的とした。

Whole-group 同一性と Subgroup 同一性の操作

Whole-group 同一性と Subgroup 同一性についての操作チェックの結果、Whole-group(本研究ではサークル)への同一性の程度も Subgroup(行為集団)への同一性も、シナリオの中のサークルへの参加

頻度と損害を与える行為を行った集団の成員との親しさの両方から影響を受けていた。具体的には、行為集団の中に親しい友人がいる方が、Whole-group 同一性も Subgroup 同一性も高かった。また、Whole-group 同一性はサークルへの参加頻度が高いほど Whole-group 同一性は高かった。具体的には、サークルへの参加頻度が高い場合と中程度の場合の方が参加頻度が低い場合よりも Subgroup 同一性が高いという結果が得られた。本研究では Whole-group と Subgroup の両方の操作の影響が表れたが、Whole-group 同一性得点は Whole-group の操作に着目すると Whole-group への参加頻度が高い方がより高く、Subgroup 同一性得点は Subgroup の操作で親しい友人が存在する方がより高かったため、本研究での Whole-group と Subgroup の操作は成功しているとみなした。Goto & Karasawa(2011) では、Subgroup のみを操作し、Whole-group は操作せずに測定を行った。そしてその結果、Subgroup 同一性にのみ行為集団の成員との親しさが影響を及ぼした。これに対して本研究では、提示したシナリオの中に Whole-group と Subgroup の両方の記述を記載することで Whole-group 同一性と Subgroup 同一性の操作を行った。このような方法を用いたために、本研究では同一性について Whole-group と Subgroup 両方の操作が影響したと考えられる。本研究では Subgroup の操作をする際にはどちらかだけを記述すると不自然になるため、Whole-group と Subgroup の両方の記述を記載したが、このような方法では Whole-group と Subgroup を独立に操作することは難しいのかもしれない。

集合罪悪感と集団同一性の関連について

集合罪悪感と集団同一性についての関連を検討するために分散分析を行った結果、Whole-group 同一性が高い場合や中程度の場合の方が Whole-group 同一性が低い場合よりも集合罪悪感を感じていた。また、Subgroup 同一性が高い方が集合罪悪感を感じているという結果となった。

Klein et al.(2011) は、Whole-group 同一性が中程度の場合が最も集合罪悪感を感じるという曲線関係にあるという結果を示していたが、本研究では Whole-group 同一性が高い方が集合罪悪感を強く感じていた。本研究の結果では Whole-group の High 条件と Middle 条件の間には集合罪悪感を感じる程度に差がなく、High 条件と Middle 条件の間で差が出るように実験操作ができていなかった可能性がある。High 条件と Middle 条件をはっきりと区別する操作方法を検討する必要があるだろう。

本研究では、集団同一性が正当性および有責性を媒介して集団同一性に与える影響についても検討を行った。正当性・有責性を媒介変数とした媒介分析を行った結果、Whole-group 同一性についても Subgroup 同一性についても、同一性を強く感じるほど集団の行為について自分の責任を感じることがわかった。そして、自分の責任を感じるほど集合罪悪感を強く感じていた。集合罪悪感と集団同一性の関連について Goto & Karasawa(2011) は、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が正当性を媒介し、それぞれ集合罪悪感に別の影響を及ぼしていることを示している。しかし本研究の結果では、Whole-group 同一性も Subgroup 同一性も正当性に有意な影響を与えていなかった。本研究における正当性得点は、平均が低く、標準偏差が小さかった。本研究で用いた“講義時間中に騒いだ”という場面では、行為の正当性の判断が「正当性がない」という方向に偏ってしまったのかもしれない。今後の研究では、実験参加者によって正当性の判断に違いがでるようなシナリオを使用する必要があるだろう。

また、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が集合罪悪感に異なった影響を与えるという先行研究の結果(Goto & Karasawa, 2011) とは異なり、Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が双方とも行為の正当性への影響がなく、有責の認知を媒介して集合罪悪感に正の影響を与えるという結果が得られた。このように Whole-group 同一性と Subgroup 同一性が集合罪悪感に似た影響を及ぼした理由として、Whole-group と Subgroup が類似したものと考えられた可能性がある。本研究で提示した集団は「自分が所属するサークル」と「サークル内の行為集団」だったので、実験参加者が想定したサークルの規模が小さいものだった場合、Whole-group と Subgroup の成員がほとんど変わらないものになるため、感じる同一性が近いものになると考えられる。Whole-group 同一性と Subgroup 同一性と集合罪悪感の関連を検討する際には、ある程度の数の成員が存在する集団を設定する必要があることが示唆される。

引用文献

- Branscombe, N. R. (2004) . A social psychological process perspective on collective guilt. In N.R. Branscombe & B. Doosje (Eds.) , *Collective guilt: International perspectives*. Cambridge : Cambridge University Press, pp.320-334.
- Branscombe, N. R., Slugoski, B., & Kappen, D. M. (2004) . The measures of collective guilt. In N. R. . Branscombe & B. Doosje (Eds.) , *Collective guilt: International perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.16-34.
- Doosje, B., Branscombe, N. R., Spears, R., & Manstead, S. R. (1998) . Guilty by association: When one's group has a negative history. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 872-886.
- Goto, N., & Karasawa, M. (2011) . Identification with a wrongful subgroup and feeling of collective guilt. *Asian Journal of Social Psychology*, **14**, 225-235.
- Gunn, G. R., & Wilson, A. E. (2011) . Acknowledging the skeletons in our closet: The effect of group affirmation on collective guilt, collective shame, and reparatory attitudes. *Personality And Social Psychology Bulletin*, **37**, 1474-1487.
- 本間道子 (2009) . 5章 集合罪悪感 有光興記・菊池章夫 (編著) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.89-105.
- Karasawa, M. (1991) . Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 298-307.
- Klein, O., Licata, L., & Pierucci, S. (2011) . Does group identification facilitate or prevent collective guilt about past misdeeds? Resolving the paradox. *British Journal Of Social Psychology*, **50**, 563-572.
- 大石千歳 (2001) . 集団同一視尺度(7項目および12項目版) 堀洋道(監修) 吉田富二雄(編著) 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社 pp.221-225.
- Powell, A. A., Branscombe, N. R., & Schmitt, M. T. (2005) . Inequality as Ingroup Privilege or Outgroup

Disadvantage: The Impact of Group Focus on Collective Guilt and Interracial Attitudes. *Personality And Social Psychology Bulletin*, **31**, 508-521.

清水裕士・村山 綾・大坊郁夫(2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, **106**(146), 1-6.

Zebel, S., Pennekamp, S., van Zomeren, M., Doosje, B., van Kleef, G. A., Vliek, M. & van der Schalk, J. (2007). Vessels of gold or guilt: Emotional reactions to family involvement associated with glorious or gloomy aspects of the colonial past. *Group Processes and Intergroup Relations*, **10**, 71 - 86.